

高齢者の記憶から生
まれた物語を舞台に
したら北九州の記憶
になつたおはなし

高齢者の記憶から生
まれた物語を舞台に
したら北九州の記憶
になっただおはなし

Prologue

プロローグ

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと…様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

北九州芸術劇場では2012年度より、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手劇作家がインタビューを行い、個人の記憶から発想を得た新しい物語を作る『Re:北九州の記憶』事業を続けています。生まれた物語は演劇作品として舞台上演し、公演を観た方々の新たな記憶として～記憶のバトン～が渡されています。この街のどこかに存在する誰かの記憶が、人と人とのあいだを行き交い、ある時は新たな記憶となり、街の記憶へと昇華されていく。この事業を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達自身であることに気付くこと、そして、生まれた作品達が、この街の財産となることを目指しています。

2003年の開館以来、北九州芸術劇場では、北九州に「劇場文化を育む」というミッションの下、「観る」「創る」「育つ」「支える」という4つのコンセプトに沿って、多様な事業を展開しています。

この報告書は、北九州芸術劇場が取り組んできた”創る”創造事業及び”育てる”学芸事業の複数年継続プログラムのうち、2021年度に10年目を迎えた『Re:北九州の記憶』を対象に、2021、22年度の2か年にわたって実施してきた「創造・学芸事業調査研究」の成果をとりまとめたものです。本調査が、地域文化の拠点として、劇場やホールが今後取り組むべき企画立案や事業展開のほか、コーディネーター人材育成の一助となれば幸いです。

この場をお借りしまして、本調査研究のヒアリング調査にご参加いただきました方々、アドバイザーの皆様、ニッセイ基礎研究所様、並びに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

北九州芸術劇場

Contents

目次

2	プロローグ
4	第1章 『記憶』ができるまでを解きほぐす
6	『Re:北九州の記憶』ができるまで
8	① インタビュー
10	② 戯曲執筆
12	③ 稽古
14	④ 本番
16	⑤ 関連企画
18	第2章 数字と言葉で『記憶』を語る
20	データでみる『Re:北九州の記憶』
22	『Re:北九州の記憶』の戯曲に登場した場所や食べ物
24	『Re:北九州の記憶』の物語とまちの歴史
28	総括—『Re:北九州の記憶』の役割と価値
32	① 地域の記憶の伝承
35	② 人材育成
38	③ 集会的創造性
41	④ 文化的コモンズ
44	⑤ 公共劇場の価値創造
48	資料編
50	『Re:北九州の記憶』公演の記録
52	『Re:北九州の記憶』戯曲一覧
54	アドバイザー会議の委員紹介、開催概要
55	エピローグ

『記憶』ができるまでを解きほぐす



高齢者の記憶から生まれた物語を舞台にした北九州の記憶になったおはなし

『Re:北九州の記憶』ができるまで

インタビュー協力者の募集

「あなたの『記憶』を聞かせてください。」

心に残る貴重な体験や思い出をお話いただけるインタビュー協力者を募集。

「あなたの『記憶』を聞かせてください」

1

インタビュー



劇場や時には高齢者の自宅で、若手劇作家が取材をする。お年寄りたちは話を聞いてもらう喜びを感じ、劇作家はお年寄りの貴重な体験や思い出に心を揺さぶられる。(→p.8)

貴重な体験や思い出を聞く

2

戯曲執筆



リアリティーのある虚構を生み出す

お年寄りたちの記憶をもとに、劇作家が戯曲を綴りはじめる。事実を再構築し、より多くの人に伝わる虚構を生み出す。劇作家同士や構成・演出のアドバイスを受けながら何度も練り直される。(→p.10)

「個人の歴史」が「街の歴史」となる

5

関連企画



個人の記憶は街の記憶へと昇華する

市内の図書館や市民センター、文学サロンなど、様々な場所で、俳優が戯曲を読み上げる朗読公演や市民が戯曲を朗読する講座が開催されてきた。個人の記憶は街の記憶へと昇華していく。(→p.16)

4

本番



舞台と客席を行き交う温かな共感

客席の照明が暗くなり、舞台上に照明が入る。目の当たりにする舞台が、今の北九州と地続きだということに気づかされる。そこには、舞台と客席を行き交う温かな共感が満ちあふれている。(→p.14)

3

稽古



作品としての『記憶』が立ち上がっていく

台本を片手に俳優が台詞を声に出し、スタッフがアイデアを出し合う。お互いに切磋琢磨し、刺激を与えあいながら成長するチャンスだ。劇場の総力をかけて『記憶』が立ち上がっていく。(→p.12)

『Re:北九州の記憶』ができるまで

1 インタビュー

「あなたの『記憶』を聞かせてください」

チラシや市報、ウェブサイトを通じて、市内に暮らす70歳から85歳の方を募集する。若手劇作家が取材を行い、伺った実話をもとに戯曲を執筆する。伺った話を、そのまま戯曲にするのではなく、劇作家のアイデアや創造性を盛り込んだ新たな物語が創作される。

お年寄りたちは、貴重な体験や思い出、エピソードを若者に聞いてもらうことに喜びを感じ、それを受け止める劇作家は心を揺さぶられる。

「個人の歴史」が「街の歴史」となる、最初の第一歩だ。



台本は
棺に入れる
もののひとつ

話したことがネタになって一つの新しい舞台作品が出来上がっていることは、やっぱりうれしいというか、もう生き甲斐に近いと言えるかもしれませんね。

(インタビューに協力した小田さん)

しみじみと思い浮かべて、冥途の土産ができましたって感じ。あの世に行ったら、父と母を探し当てて話してみます。「あんたたちの話、残っとるよ」と。それまで私にとって北九州の記憶はまだまだ終わっていません。

(インタビューに協力した坂根さん)

私の話が題材になった台本を、繰り返し読み返してみました。これ、私が死ぬときにお棺に入れるものの中に入れておこうと思っています。

(インタビューに協力した島さん)

話を聞けば聞くほどですね、「そんなことが起きるのか」みたいな、そこに焦点を当てたくなるんです。一番面白かったのは、取材した方が「こういうことがあったのよ」とか言って、笑って話していて。相当しんどいことが目の前で起きていたのに、笑ってそれを話しているというところを書きたくなった。

(劇作家の寺田さん)

話してくださる方は、やっぱりそこに何か伝えたいとか、残したいという志(こころざし)のようなものがあって応募してくる方が多いんです。それこそ戦争体験など、今の若い人たちが体験できないものは往々にしてつらいことが多いんですけれども、そういうことを話したい方が多いんですね。

(劇作家の鶴飼さん)

何か伝えたい、
残したい、
という志

みんなが
歴史を
持っている

その戯曲が、私が主人公の、由美ちゃんの話だと気づいた時、自分の息子みたいな歳の人が、この台本の台詞のように思ってくれるんやったらそれでいい。嬉しいと。

(インタビューに協力した島さん)

私たちぐらいの年は戦時中を生きて、自分が完全に変わってしまった時代を生きてきたからね。今の人には考えられないような経験をしてきたから、みんなが歴史を持っていますよね。だから、みんなそれぞれに話せる思い出があるかな、と思ったんです。

(インタビューに協力した坂根さん)

『Re:北九州の記憶』ができるまで

2

戯曲執筆

お年寄りたちへの取材で聞き取った個人のかげがえのない記憶をもとに、劇作家たちは舞台上の物語を構想し、戯曲を綴りはじめる。お年寄りの話から登場人物を設定して台詞を与えるような作業ではない。お年寄りが語った事実を再構築し、脚色を加えて、より多くの人に伝わるリアリティーのある虚構を生み出すのだ。

この執筆の過程で、劇作家たちと構成・演出の内藤さんは幾度となく意見を交換する。原案は劇作家同士で声に出して読み上げられ、ダメ出しと練り直しが繰り返される。

そして、毎年劇作家たちが書き上げた10本前後の戯曲は、最終的に、内藤さんの手で1本の上演台本に構成されていく。



根源的に
持っている
願いや思いを探す

どんな生き方をしている、どんな体験をしていたとしても、みんなが根源的に持っているであろう願いや思いみたいなものを、エピソードの中から必死になって探しています。

(劇作家の鶴飼さん)

ライターさん次第ですからね。いわゆる劇作家の力量というか、思いというか、人の話を聞いて彼女や彼がどう感じるのか。それ次第で良い作品になっていくものでしょう。

(インタビューに協力した小田さん)

演劇を使って
記憶を
形にする

演劇で人に伝えるということは、単純に自分のプライベートな思い出を話すのとは全く違うということ。演劇には、人の持っている普遍的な思いを込めて、多くの人に広げる力がある。そこに信頼を置けているかどうか、です。

(劇作家の鶴飼さん)

その時代の全体的なことは、資料館などに行けばもっと詳しいことを知ることはできるんですけど、お年寄りの一点の記憶を知ろうと思っても、どこを調べてもないんです。それをもっと何か別の形にしなければというときに、演劇という手法を使って形にするっていうことは……いいことだと思います(笑)。

(劇作家の寺田さん)

十年
積み重ねてきた
内藤さんとの関係性

劇作家が書いてきたものを、自分が整理して整えていくということが、最初の4、5年がありましたから。それが最近では、最初に書いてきたものが、それなりにある一つの劇作家のイメージのベースの上に乗っている感じがする。少しアドバイスすれば進んでいくので。そういう意味ではとても成長していると思います。

(構成・演出の内藤さん)

昔はインタビューした高齢者の方のお話自体が面白くて、それが演劇の面白さという感じだったんですよ。最近の戯曲は、それに加えて、劇作家の個性がより出てきていて。内藤さんのアドバイスも聞くけど、自分がやりたいように書いてみたという人もいて。そこは10年積み重ねてきた内藤さんとの関係性なんじゃないかなって。

(照明スタッフの磯部さん)

3

稽古

構成・演出を手掛ける内藤さんのもと、完成した上演台本を片手に俳優が台詞を声に出す。舞台監督、照明、音響、スタッフがアイデアを出し合う。広報は情報を発信し、制作は観客を迎え入れる準備を進める。

公演に向かって一人ひとりが自主的、自発的に動き、経験値の高いメンバーは若いメンバーにアドバイスを与えながら、少しずつ舞台が形作られていく。普段、地域で別々の演劇活動をしている俳優たちだが、ここでは共に一つの舞台を作るチームの仲間だ。お互いに切磋琢磨し、刺激を与えあいながら成長するチャンスでもある。

北九州芸術劇場の総力をかけ、やがて舞台作品としての『記憶』が立ち上がっていく。



出す
アイデアを
すごい速度で

稽古期間がギュッと凝縮されているので、濃度が高いなど。普段とは脳みその回転が違うかもしれない。ギアを上げているかもしれません。体感が速くなる気がします。ついていくのに必死です。

(俳優の高山さん)

内藤さんと作品を作るので、そこは経験や勉強になることが多いです。とくにリーディング公演は1週間で作るの、ものすごい速度でアイデアを出していかないと間に合わなくて、絞り出しても出ないときもあるんですけど、何とかしないといけない、みたいな。

(照明スタッフの磯部さん)

みんな
一つの作品を
作っている

内藤さんの演出を受けると、芝居の質は変わりますね。身近な俳優が何人か出て、演劇に対する姿勢というか、俳優としての演技の見方、相手がいるこその受け取り方が、やっぱり明確に変わりましたね。

(舞台監督の谷川さん)

この劇場は舞台装置を造るスタッフがいて非常に充実しているので、いい舞台を作ってくれますから。まさに総合芸術というか、みんなでチームになって1つの作品を作っているんじゃないでしょうかね。

(インタビューに協力した小田さん)

私、頑張り
出るんだぞ、
『記憶』に

基本的に、私が内藤さんから受け取っているのは、「自由にやってみろ」って言ってもらっている感じですかね。やらせてくれるというか、成長の場にさせてくれる、懐の広さみたいなのが感じます。

(音響スタッフの横田さん)

『記憶』は私もずっと見てきたから、「それに出るんだぞ、私、頑張りよ」みたいな気持ち、プレッシャーみたいなものを感じちゃいます。自分が出演するようになって『記憶』の質を下げているのかなと、心配ばかりで。ずっと出ていらっしゃる方々の力量とか、稽古での対応の仕方とか、やっぱりうまいな、と思います。

(俳優の高山さん)

『Re:北九州の記憶』ができるまで

4 本番

120席ほどの小劇場に老若男女が集う。客席の照明が暗くなり、舞台に照明が入る。観客の眼は俳優の表情や一挙手一投足を追いかけて、台詞に耳を傾ける。ユーモラスなシーンでは劇場全体が笑いに包まれる。

『記憶』の本番が通常の演劇公演とは少し異なる空気で満たされるのは、地元ならではの地名や方言が出てくるからだけではないだろう。舞台上の登場人物に、自分を、親を、祖父母を重ね合わせたり、知らなかった過去の事実に驚いたりしながら、目の当たりにする舞台が、今の北九州と地続きだということに気づかされるのである。

そこには、舞台と客席を行き交う温かな共感が満ちあふれている。

まだ生きていて
くれる両親を
理解できた

秘めていたものを出したということに、安堵感っていうのかな。私の話を劇作家が別の言葉で脚本にし、それを俳優が舞台上で話すのを私の目で見て、「あなたは私やけんね。よう言うてくれたね」と。子どもの頃、父や母には楯突かずに黙って見てきたことだったので。

(インタビューに協力した坂根さん)

母がインタビューに参加して、その話が上演されると聞き観に行きました。舞台が始まると、引き込まれてタイムスリップし、幼くて悲しかった事がよみがえった。昭和の大変な時代に父25歳母20歳の時、北九州に夢を描いて移住。今、自分も年を重ねて、母になり記憶をたどり、色々考える機会を得て、父母の苦勞と気持ちが少しわかるようになりました。

(観客の野中さん)

私は皆さんが作ってくれたお芝居のおかげで、母に対する見方が変わったんです。で、私の人生を否定する必要がないことが、すごくよく分かったんです。

(インタビューに協力した島さん)

まったく別の人がお話された個人の記憶なんですけど、舞台上で発表された途端に、皆さんの普遍的な記憶の中にどうやら届くらしくて。そして観客はそこにつながる自分の記憶を思い出します。今まで演劇をやって、そういうお客さんの反応は見たことがない。その感覚が、すごく『記憶』らしいお客さんの反応だなあいつも思います。客席の雰囲気は温かいんですね。

(劇作家の鶴飼さん)

個人の記憶が
誰かの記憶に
届く

劇作家や劇場が
作品に責任を
持っている

北九州にお住まいの高齢者の方にインタビューをして、一本の作品を作り上げていくという根幹は変わらずに10年ずっと続けていると思うんですけど、俳優が違えば、照明、音響などのスタッフが変われば、作品自体の特徴というか、印象は全然違うものになるなと思って。だから、毎回、同じタイトルでありながら、毎回、別の作品を見ている気がして、本当に次が楽しみです。

(観客の森田さん)

地域参加っていえば、地元の人と一緒に出演するような公演はあちこちにあると思うんですけど、地域の劇作家がインタビューをして、一つの舞台作品に仕上げていくというところに、劇作家や劇場全体が責任を持っているという感じがしたんです。

(観客の為貞さん)



『Re:北九州の記憶』ができるまで

5

関連企画

生まれた戯曲は、劇場の舞台の上で上演されるだけではなく、市内の図書館や市民センター、文学サロンなど、様々な場所で披露されてきた。

俳優が戯曲を読み上げる朗読公演では、戯曲に描かれたかつての街の姿を知る地元のお年寄りたちが、懐かしさに思わず声を出したり、思い出話に花が咲いたり。市民が戯曲を朗読する講座では、自分が登場人物になり切って、台詞の掛け合いを楽しみ、表現するよろこびを実感する。

戯曲となった『記憶』は、別の誰かの記憶を呼び起こし、人と人のあいだを行き交いながら、ある時はそれが新たな「記憶」となり、個人の記憶は街の記憶へと昇華していくのである。

受講生同士で
さらに話が
深まっていく

八幡図書館で「戯曲をみんなで声に出して読んでみよう」という講座をやっているんですけど、受講者は年配の方が多く、その方たちにさらに『記憶』の物語についての話を深く聞くと、受講生同士で話がさらに深まっていく。すごく広がっているんだなっていうのを感じます。

(劇作家の守田さん)

朗読講座の最初の年や2年目に、「大人になってこんなふうに出して何かを表現することはないから、すごく楽しい」という声をいっぱいいただいて、戯曲は本の朗読とはちょっと違うので、自分を表現する楽しみを図書館の講座で味わっていただきたいなと思ったのが、戯曲講座の始まりでした。

(八幡図書館職員の高原さん)

戯曲の
掛け合いの
楽しさ

私は医療関係の仕事をしていて、患者さんと、独り暮らしで誰とも話さなくなったら声が出なくなったという方が何人かいたので、自分もじっと家にいると声が出なくなるな、と思って朗読講座に行ってみよう。老化で筋肉が落ちてくるんじゃないでしょうか。発声はいつもしていたほうが良い。

戯曲講座は、掛け合いなんですよ。どんな感じの間でいか、自分がその人になったらどうするかなどいろいろ考えてするようになって。普通の朗読のときはそこまで考えなかったんですけど、すごく楽しくて。一人で普通の小説を読むよりも、戯曲の掛け合いのほうが楽しい。

(講座に参加した吉田さん)

女優のような
気持ちにな
った

最初は気恥ずかしかったんですよ。朗読はただ読むんですけど、やっぱり台詞になるじゃないですか。結構ほかの人は役になり切っていたので、あれっと思って(笑)。でも来てくれた女優さんが、素人なのに一緒に読み合わせをしてもらって、「こういう感じで言ったほうが良いよ」って言ってくださるんですよ。女優さんになったみたいで気持ちよくなっちゃって、楽しくなりました。

(講座に参加した今林さん)

市民センターでの公演をやって、八幡製鐵所の話になっただけで、「ああ製鐵〜!」みたいな歓声が上がります。『記憶』ってこれがいんじゃないかって思ったんですよ。普段劇場に足を運ばない人にも見てもらえる。一番見てほしい人たちだったんじゃないかと思います。

(照明スタッフの磯部さん)

高齢者の記憶から生まれた物語を舞台にしたら北九州の記憶になったおはなし



数字と言葉で『記憶』を語る

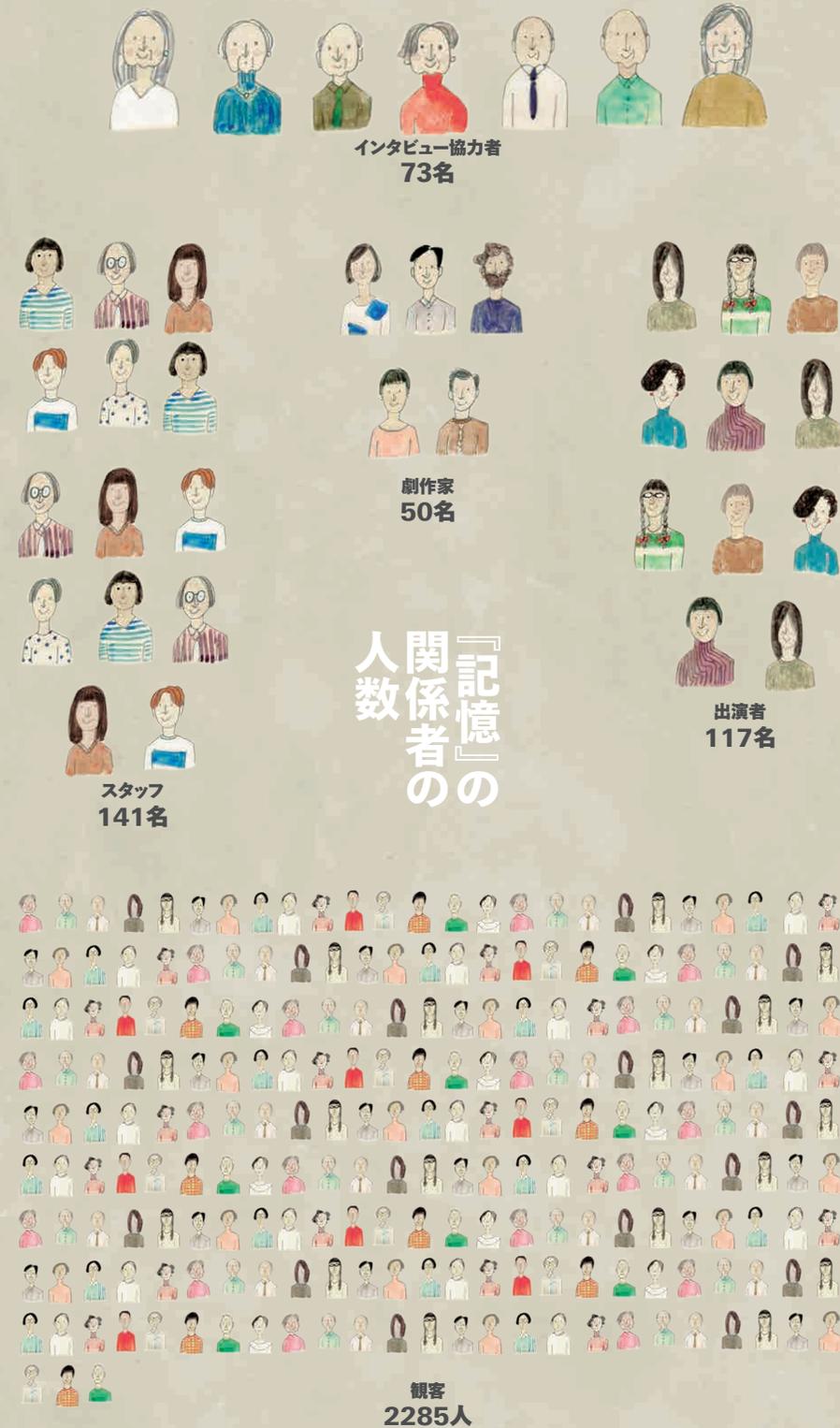
ひろがる記憶の輪



データでみる

『Re:北九州の記憶』

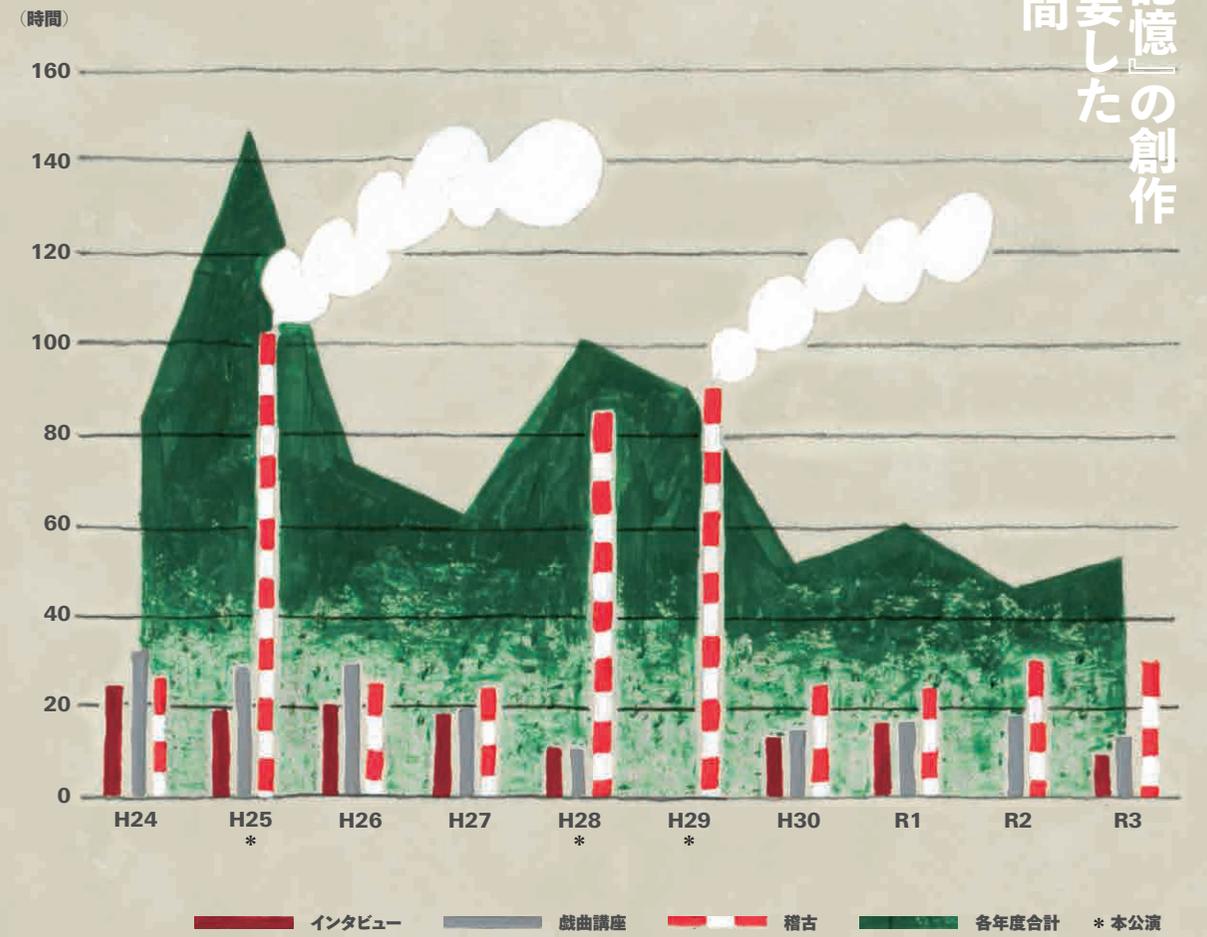
※いずれも延べ人数で集計



平均年齢



『記憶』の創作に要した時間



平成24年度から令和3年度までの10年間の『Re:北九州の記憶』に関わった人々をデータで整理する。インタビューに協力した高齢者は73名で平均年齢は78.8歳、インタビューをもとに戯曲を創作した劇作家は50名で平均年齢は32.0歳、劇場での上演に携わったスタッフは141名で平均年齢36.5歳、出演者は117名で34.4歳、そして公演での観客数は2,285名、アンケート調査に回答した観客の平均年齢は44.0歳となっている。なお、北九州市民の平均年齢は47.5歳(2022年6月時点)となっている。また、10年間で『記憶』の創作に要した時間をデータで見ると、高齢者のインタビューに要した時間は合計140時間、戯曲講座は191.5時間、稽古は470時間、総計すると801時間が費やされてきた。各年度での変化を見ると、平成25、28、29年度では俳優が台本を手離して本格的な演出による「本公演」であったため、台本を持ちながら演じる「リーディング公演」に比べて稽古に要する時間が大きく異なっている。

『Re:北九州の記憶』の 戯曲に登場した場所や食べ物

北九州市は、福岡県の北部、九州最北端に位置し、関門海峡を隔てて本州に面する。1963年(昭和38年)に、門司、小倉、戸畑、八幡、若松の5市合併、九州初の政令指定都市として誕生。現在は、7つの行政区で構成されている。



⑥ 高塔山(たかとうやま)

標高124m。山頂部の公園には四季の花々が植えられ、アジサイの名所として多くの人で賑わう。河童封じの地藏尊や同区出身の作家・日野葦平文学碑もあり、展望台からの夜景は「河童の隠した宝宝箱」とキャッチコピーが付けられている。

資さんのぼた餅(すけさんのぼたもち)

1976年に戸畑区一校で創業し北九州市を中心に展開するうどんチェーン店「資さんうどん」の名物。「お食事と一緒に」ぼた餅を食べる」北九州独特の文化を大切にしたいと言う創業者の想いを継承して作られ、多くの人に愛される北九州のソウルフード。



⑦ 戸畑祇園大山笠(とばたぎおんおおやかさ)

起源は1803年と伝えられており、200年を超える歴史を持つ福岡県夏の三大祭りのひとつ。国の重要無形民俗文化財に指定され、ユネスコ無形文化遺産にも登録された。「提灯山」の使用で親しまれ、「ヨイトサ、ヨイトサ」のかけ声とともに進む姿は圧巻。



⑤ 若戸大橋(わかとおおはし)

1962年開通。若松区と戸畑区を結び、洞海湾に架かる長さ627mのつり橋。当時は東洋一の長さを誇り、日本の長大吊り橋の先駆けと賞された。令和4年に国の重要文化財に指定され、ライトアップされた橋は日本夜景遺産にも認定されている。



⑧ 製鉄・東田の溶解炉(せいてつ・ひがしだのようかいろ)

1901年に操業をはじめた近代製鉄発祥の地・官営八幡製鐵所。八幡製鐵所は日本の産業近代化、戦後の復興や高度経済成長をけん引し、製鐵所を中心とする工場群は北九州市の繁栄の象徴となった。1972年まで操業を続けた10代目の東田第一高炉が保存され、2015年には「明治日本の産業革命遺産」の世界文化遺産に登録。そのシンボリック存在となっている。



① 門司港駅(もじこうえき)

1914年(大正3年)に創建され、1988年に鉄道駅として日本で初めて重要文化財に指定された。木造2階建ての駅舎は、左右対称の造りが特徴的なネオルネサンス様式で、建物の中央部は「門」の文字を表現していると言われている。2012年から復元改修工事が行われ、約6年半の歳月を経て、大正時代の姿へ復元された。



② 井筒屋(いづつや)

1935年創業、北九州市を地盤とする百貨店。1936年の小倉本店の開店以来、地域の人々に親しまれる老舗デパート。井筒屋名物「いづつや饅頭」は約70年に渡って老若男女に愛されるづけるロングセラー商品。



③ 旦過市場(たんがいちば)

大正初期に始まり、100年以上の歴史を誇る「北九州市の台所」。昭和ムード漂う市場には地元産の海産物や野菜、惣菜などが所狭しと並んでいる。郷土料理のイワシやサバの「ぬかみそ炊き」はここに來たら食べておきたい一品。

湖月堂の栗饅頭(こげつどうのくりまんじゅう)

1895年に小倉で創業された老舗菓子屋。創業当時より作られている栗饅頭は看板商品として地元民に長く親しまれている。小判の形で表面は艶やかな栗色に焼き上げられ、しっとりやわらかい餡の中に栗を練りこんだ、北九州土産の定番。



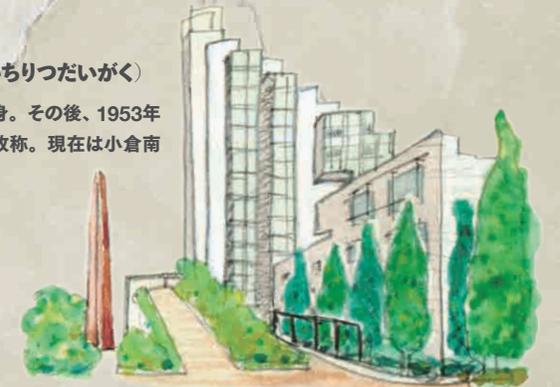
戯曲 登場回数 TOP3ワード

- 1位 製鐵
- 2位 井筒屋
- 3位 紫川

北九州市の歴史の土台ともいえる製鐵は、高齢者の方々の記憶にも深く根付いていました。

④ 北九州市立大学(きたきゅうしゅういちりつだいがく)

1946年に創立された小倉外事専門学校が前身。その後、1953年に北九州大学、2001年に北九州市立大学に改称。現在は小倉南区と若松区にキャンパスがある。通称北九大。



まちの歴史と『Re:北九州の記憶』の物語

※「戯曲タイトル」(執筆年度)

戦争にまつわる記憶

「天井」(H27)

「焼夷弾が降る前に天井を外す」という父親と「焼夷弾が降れば天井は外れる」という娘の、ある日の小さな攻防。

「松の皮を削る話」(R1)

戦時中、軍用機の潤滑油が底をつき、若松の高塔山で国のために松の皮を削り松脂集めをする少年たち。

「カンパン」(H25)

終戦直後の小倉。陸軍倉庫から持ち帰ったカンパンを運ぶ、ある一家の物語。アメリカ兵が取返しにやってくると噂が流れ、必死に隠す親子。コミカルなやり取りの中にも当時の食料事情が垣間見える一面も。



「カンパン」



「天井」



「松の皮を削る話」

戦後



「林帆の海～洞海湾にて～」

昭和20年代の記憶

「林帆の海～洞海湾にて～」(H25)

若松港の岸壁にはたくさんの船。白神神社の祭りがもうすぐという時、友人の住んでいる船を探す一人の少年がいた。

「少女歌劇団の話」(H30)

戦後九州各地に存在したというご当地歌劇団のうち、八幡に存在した“小柳少女歌劇団”。本番前の楽屋には、プロとして舞台上に魂を注ぐ少女たちの姿があった。



「少女歌劇団の話」

昭和30年代の記憶

「隠し砦の三女子高生」(H26)

夏の屋下がり、豊楽園球場にて行われた小倉高校と小倉西高校の野球を応援する女子高生たちの恋の話。

「来たれ!」「演劇研究会城野寮」(H30)

かつての遊郭を寮にしまったという北九州大学(現北九州市立大学)の演劇研究会。熱き大学生たちの少しかげハチャメチャな日々物語。

「もやもや橋」(H24)

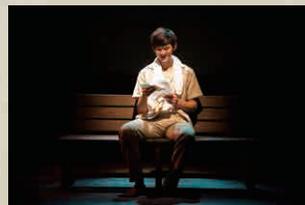
若戸大橋が開通したのに、橋のあちら側に住む結婚相手は一度も会いにこない。そして結婚式当日…。

「製鐵のタオル」「左官屋さんの恋」(H26)

左官屋さんと恋に落ちた、製鐵所幹部宅で住み込み生活をする女性。製鐵マンと結婚させたい母親の思いと左官屋さんとの初々しい恋を描いた作品。



「製鐵のタオル」



「左官屋さんの恋」



「隠し砦の三女子高生」



「演劇研究会城野寮」

いちばんあたらしい記憶

「居なくなった55人たちへ」(R3)

八幡空襲後、ひとりの同級生にも会えなくなった…。戦後74年、小伊藤山公園で行われた慰霊祭の日の物語。

令和3年 門司港駅の復元改修工事完了

平成15年 北九州芸術劇場開館
平成14年 小倉築城四〇〇周年

昭和63年 門司港駅舎国の重要文化財に指定

昭和48年 関門橋開通

昭和38年 北九州市発足
昭和37年 若戸大橋開通

昭和33年 戸畑祇園大山笠始まる

昭和20年 終戦

昭和21年 小倉外事専門学校(現北九州市立大学)創立
昭和17年 関門鉄道トンネル開通

戦前

戦中

明治45年 大渡川渡船(現若戸渡船)運航開始

明治34年 八幡製鐵所ができる

いちばんふるい記憶



「昭和12年7月31日」

「昭和12年7月31日」(H25)

全国大会を目指し順調に勝ち抜いてきた八幡製鐵所硬式野球部。都市対抗の全国大会出場を前に監督や選手達にぞくぞくと召集令状が届き…。



総括—『Re: 北九州の記憶』の役割と価値

株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室

『Re: 北九州の記憶』(以下、『記憶』)の事業の目的は2つある。1つは演劇的手法を用いた次世代への「地域の記憶の継承」であり、もう1つは、劇作家を中心に俳優やスタッフなどを含む地域の表現者の「人材育成」である。この2つの目的に沿って『記憶』が果たした役割を述べたい。さらに、事業に関わる様々な立場の人々の変化や相乗効果について、「集会的創造性」、「文化的コモンズ」、「公共劇場の価値創造」の3つに集約した。この5項目における『記憶』の役割と価値について考察する。

(1) 地域の記憶の伝承——「話したい」と「聞かせてほしい」の交感と循環

2012年度から10年を数える『記憶』の成果の一つが、作品を通して地域の記憶を伝承することである。高齢者への取材を経て劇作家が戯曲を創作し、その高齢者にも、一般の来場者にも公演を観ていただく。その過程で「個人の記憶」が「地域の記憶」へと昇華する。『記憶』は、演劇ならではの手法を用いて、郷土史に記された歴史とは別の、よりリアルな、より多くの人に伝わる歴史的な出来事を語り継ぐ作業でもある。

『記憶』は「北九州弁」で演じられる。地元ならではのネタでの客席の反応や笑いは、観客が『記憶』をどのように受け止めているかを雄弁に物語っている。他の演劇公演にはない独特の温かい反応を感じる、観に来た人が自分の祖母や祖父の話聞きたくするのではないかと、という劇作家や俳優の意見は、観客を介して、その共感と余韻が市民に広がっていく様子を感じさせる。観客層の広がり、とくに若い観客層が増えているという事実は、10年間の継続のたまものである。

お年寄りの「話したい」という気持ちが作品の出発点になっている、現代のお年寄りのあり方にこの芝居を成立させる秘密がある、という構成・演出の内藤さんの指摘は、『記憶』の本質的な価値を物語っている。高齢者へのインタビューでは、劇作家が昔の話聞きに来たときの「伝えたい」という高齢者の思いと「聞かせてほしい」という劇作家の思いの交感から、出会いの喜びや互いへの敬意が生まれている様子が伝わってきた。高齢者にとっては子どもや孫のような世代の若い劇作家が、「身を乗り出して」話を引き出す。

劇作家は、高齢者の話から戯曲を執筆するため、受動的に「聞く」のではなく、能動的、積極的に「聴く」ことになる。そうした劇作家の態度が、お年寄りには大きな刺激となっている。取材で話した内容が、自分にとって辛く苦しい体験だったとしても、それに創作が加わり、自身が話したエピソードとは異なるストーリーの演劇作品に生まれ変わることに、お年寄りは喜びを感じている。

また、劇作家が創作した台本をお年寄りが初めて読んだときに、取材で話した数々のエピソードの中で「なぜこの話を作品に取り上げたのか意外だった」という意見が複数あり、その意外性を面白いと感じていた。それほど、高齢者の劇作家に対する信頼は厚く、自由な創作を前向きに受け入れている。

劇作家には、お年寄りの大切な記憶を、劇作家自身のフィルターを通して物語にすることへの葛藤もある。世代が離れ、生きる時代が違うからこそ、劇作家は、個人の記憶を超えた普遍的な願いや夢を探し出したいという強い思いを持ち、演劇ならではの可能性を感じている。とくに若い劇作家にとっては、戦争の話自体が大きなショックであり、今の自分の生活との大きな隔たりが創作のイメージにつながっている。

過去のことを物語として書くのではなく、実際にあったこととして書く、という劇作家の感覚は、『記憶』が地域の記憶を伝承する一つの視点と考えられる。高齢者の記憶と自分たちが生きる現代とが「地続きだと感じた」、劇作家が書くこと、観客が観ることで「主観的な記憶が客観的なものになっていく」という劇作家のコメントからも、『記憶』はこの先も地域の記憶を伝承し、循環させていく可能性が示されている。

(2) 人材育成——劇作家、俳優、スタッフなど地域の演劇人の成長を下支え

『記憶』のもう一つの役割が、地域の演劇人の育成である。中でも劇作家、俳優、スタッフたちは、普段とは異なるプロセスで創作することで、それぞれの表現能力や技術を磨く場として、『記憶』の独自性を認識している。

劇作家が感じる成長の手応えは、彼らだけでなく、構成・演出の内藤さんや、俳優・スタッフも認めている。年を経るごとに、初稿のレベルが高くなったという内藤さんの評価に加え、複数の劇作家が『記憶』の参加後に、戯曲賞の受賞やハードルの高い助成事業の採択につながっている。

北九州の劇作家が劇作を継続するうえで『記憶』は大きな役割を果たしている。演劇分野の人材育成で、劇作家を対象とし、創作した戯曲を本格的に上演する事例は、国内の劇場では希少である。しかも、育成の対象である劇作家に台本執筆料が支払われることが、劇作家を志す若者にとって、北九州を離れずに活動を続ける大きな支えとなっている。

『記憶』は地元の俳優たちの育成の現場でもあり、劇作家やスタッフも出演した俳優の成長を認めている。俳優は、リーディング公演は約1週間という短期間で本読みから稽古、本番を迎えるため、瞬発力を持って作品を仕上げなければならない難しさを指摘するが、それが『記憶』ならではの俳優育成のあり方だと言える。

しかし、俳優から多く聞かれたのは、『記憶』があることで、北九州で俳優を続けていく自信につながっているという声だった。俳優を志して東京に出る人もいる中で、北九州で別の仕事をしながら俳優を続けられるというのだ。劇作家も俳優も「演劇をやりながら人生を歩んでいく」という環境を、北九州芸術劇場や『記憶』が提供している。

スタッフからは、10年間の継続による作品の質的变化が指摘された。制作、広報、舞台技術などの専門領域を越えて、一緒に携わることが、多くの学びや貴重な経験になっている。そのうえで表現されるものが明確になり、劇作家・俳優・スタッフがそれぞれの立場で表現できるようになったという意見は、『記憶』の10年間の成長を物語っている。

『記憶』は、若手の舞台技術スタッフにとっても、本番の舞台でオペレーターを務める機会や、自ら台本を読み込んで音響や照明のデザインを手掛ける機会となり、彼らの育成や成長を下支えしている。

地元の若い演劇人にとって『記憶』が目標になっているという劇作家のコメントも、この事業が人材育成として果たす役割の大きさや将来性を感じさせる。来場者からは、舞台を批評的に観ながらも、複数の戯曲を1本の作品に仕上げる構成・演出の手腕、照明や音響などのスタッフワークの成長など、公演を高く評価する意見も聞かれた。

(3) 集会的創造性——通常の演劇とは異なる創作と地域の記憶

演劇は、元々集団的な創造活動という側面が強いが、特定の才能のある人が発揮する創造性ではなく、集合することで他者と相互に依存しあい、創発的な共同体の中で創造されていくという「集会的創造性」という概念が、『記憶』の特性や成果を把握するうえで大きなヒントになる。

『記憶』は高齢者から話を聞き、戯曲を執筆し、複数の戯曲が1つの舞台作品に構成され、演出されて観客に届けられるという、通常の演劇とはまったく異なるプロセスで創作される。つまり、特定の個人に創作の責任や意思決定を委ねていないことが大きな特徴でもある。同時に、それが『記憶』ならではの価値でもある、という捉え方ができるだろう。

内藤さんから、モチーフの異なる複数の戯曲から、それぞれの内容を尊重しつつ1つの舞台作品にすることの困難さが語られたが、劇作家の「内藤さんを含めみんなで作っている」と言う発言は、『記憶』の創作の特性を物語っている。『記憶』が誰の作品か、を考えることも、本事業の価値や特性にアプローチするひとつの方法であろう。最終的に演劇として成立するまでに何人もの人に関わり、オリジナルは不鮮明になる。その過程で連鎖反応が生まれ、互いに補い合う関係ができていくことも、『記憶』の特性である。

誰の作品か、という問いかけに、内藤さんは自分の作品ではなく、あえて言えば劇作家の作品という言い方が近い、と答えているが、劇作家からは話を聞いた高齢者と自身の連名のイメージ、という意見もあった。別の劇作家からは、誰かの作品というよりも「これは北九州の記憶だ」という返答があった。高齢者の記憶がベースになった作品が、未来と過去の両方向に、共感の伝搬とさらなる創作を広げる可能性がある、という劇作家の指摘も興味深い。

北九州芸術劇場の事業方針である、“観る”公演事業、“創る”創造事業、“育つ”学芸事業という従来の事業の枠組みを超えた取り組みであることも、この事業が多様な成果や広がりを持つ要因だと考えられる。スタッフからは、劇場の担当セクションをまたがって創造や制作のプロセスに携わる事業だという指摘があり、『記憶』が劇場全体の運営やスタッフ間のコミュニケーションにも好影響を与えていることがわかる。

公演を観た観客からは、「頭で考えて観るのではなく、心で感じられる劇だった」、「舞台には『記憶』に関わる膨大な数の人が載っている」、「劇作家や劇場が責任を持って地域の記憶を伝えている」といった感想もあり、この事業の集会的創造性という特性は、舞台と客席の境界を越えた交感の広がりを感じさせる。

(4) 文化的コモンズ——戯曲という共有財産により地域に広がる文化の共有地

10年間の『記憶』の財産となるのが、劇作家たちが高齢者からのインタビューをベースに創作した89本の戯曲である。それらは毎年1冊の戯曲集として印刷・製本され、北九州市内の図書館に収められており、誰もがその戯曲を手に取り、使うことができる。つまり、戯曲は市民の共有財産となっている。実際、北九州の団体によって『記憶』で生まれた戯曲が上演されたことがあり、劇作家からは将来的なレパートリーへの可能性も指摘され、スタッフからも何らかの形で北九州に還元できる事業だという意見が寄せられた。

別の言い方をすれば、『記憶』は、高齢者の記憶を市民の共有財産に転換していく作業であり、地元の劇作家、俳優、劇場が、演劇を通じて、市民の誰もが文化的な営みに参加できる共有地、いわば文化的コモンズを生み出す共同作業と捉えることも可能であろう。

その原点に高齢者の記憶があり、北九州の歴史が下地になっていることが、コモンズとしての価値を高め、他の地域にはない北九州独自のものとしている、というのが『記憶』の本質であり地域における役割だと考えられる。

さらに『記憶』の戯曲は、公演終了後も活動を地域へと広げていくリソースとなっている。図書館で行われた戯曲の朗読公演で、作品の中に埋め込まれた記憶が、別の人の記憶を呼び覚まし、深まっていくような状況が生まれた。それは、『記憶』が北九州の歴史を戯曲という形で残すだけでなく、市民それぞれの記憶を喚起し、紡いでいくことを示している。

戯曲講座以前から図書館の朗読講座に通っていた高齢者に、本の朗読と戯曲を読むことの違いを聞いたところ、戯曲では配役に割り振られた台詞を複数人で読むことで生まれる掛け合いから、自然に交流が発生し、知らなかった人同士が仲良くなったという。戯曲を声に出して読むことで、劇場で鑑賞することとは違う楽しみに触れた喜びも聞かれた。

また、市民センターでの『記憶』の公演について、俳優、スタッフの双方からその成果、効果の大きさを指摘する意見が聞かれた。とりわけ高齢者にとって、北九州芸術劇場よりも普段行き慣れた市民センターで鑑賞する方が、親しみやすく、劇場での公演とは異なる熱気、客席と舞台との交感が生まれていたのではないか。スタッフは、その経験も踏まえ、学校向けの鑑賞型アウトリーチとして展開したい、と今後のプランを描いている。

過去の戯曲を読むことで北九州の歴史を「知識ではなく景色として知ることができた」という劇作家の指摘は、戯曲であり演劇作品であるという『記憶』ならではの特色や成果を示している。『記憶』は、地域の別の記憶を呼び覚まし、そこから別の作品が誕生するという好循環が生み出される可能性を秘め

ている。

高齢者と劇作家の共同作業で生まれた戯曲は共有財産となり、誰もがアクセスし、読み、上演することができる。実際、戯曲は図書館の講座や市民センターでのリーディング公演など、様々な形で使われてきた。まさしく、『記憶』は北九州の「文化的コモンズ」を形成する取り組みだといえる。

(5) 公共劇場の価値創造——演劇の本質的価値の追求、そこから生まれる社会的価値

構成・演出を担当する内藤さんから、お年寄りや若い人が交流しながら作品をつくるという点に関して『記憶』ほど公共劇場の仕事としての確かな企画はない、という指摘があった。地元の高齢者へのインタビューがベースになっていること、北九州では複数の若い劇作家が活動していること、若い俳優、スタッフが協働することで、北九州全体の演劇活動の底上げに繋がり、文化的な土壌が豊かになっている。それが、北九州芸術劇場という公共劇場の公益的な事業である点も、重要なポイントである。

近年では、文化芸術が持つ様々な価値に関心が寄せられている。例えば、教育や福祉、まちづくりといった社会的な領域に、舞台芸術を活用するという取り組みが各地で広がっており、北九州芸術劇場は開館以来、劇場内でのワークショップや劇場の外でのアウトリーチなどで、その好事例となるような事業に取り組んできた。

この『記憶』も、文化芸術の社会的価値を生み出してきた側面がある。例えば、観客からは、人と人との絆が希薄化する現代社会において、演劇が次世代につながるの重要性を伝えることや、演劇に触れる機会の少ない人、若い人たちのための劇場の役割に期待する声も寄せられた。北九州ならではのローカル性のある作品に触れることで、地域を見直し、シビックプライド(地域に対する誇り)にもつながっている。

高齢者福祉の効果としては、『記憶』をきっかけに取材に協力した高齢者の気持ちや行動が変化したことが挙げられる。例えば、自分がモデルとなった作品中の登場人物に共感し、自分自身を肯定し、他者に対する感情が変化したこと、外出に消極的だったお年寄りが、公演を観るために自発的に「外出したい」と家族や支援者に申し出て実際に外出できたことなどである。

図書館の戯曲講座の参加者からは、劇場での受動的な鑑賞とは異なり、声に出して台詞を読むという体験が、人とのつながりや健康の維持に役立っている様子を聞くことができた。高齢者の社会的孤立を生まないためにも、戯曲を使った図書館や文化センターでの活動の意義は小さくない。

しかし、内藤さんが断言するように、『記憶』は決して高齢者福祉が目的ではない。結果として、高齢者のwell-beingに何らかの形で貢献していたとしても、やはり演劇という芸術活動を中心に置いた「人材育成」や「地域の記憶の継承」が目的であり、公共劇場として、その目的の真摯な追求がなければ、シビックプライドの形成や高齢者福祉に辿り着くことはできなかっただろう。

その意味で、『記憶』が生み出したものは、やはり演劇という文化芸術の本質的な価値をベースにした成果だと言えるのではないか。その証左として、図書館での戯曲講座の参加者は、戯曲を読む経験を通じて、難解と思われた作品を読み直して解釈しようとするなど、演劇に対する理解が深化している。また、地元の若い劇作家や俳優たちとの出会いから、地元劇団の公演を観に行くようになっている。講座での講師と受講生という関係から、地元の演劇人たちを応援する市民との関係が形成されたのである。

地元の、誰かの記憶が舞台化されることで、今まで劇場とは疎遠だった地域住民が、劇場に足を運び、演劇の楽しさや劇場の必要性が広く認知される。そのことが「地域の芸術的民度を上げることにつながる」という内藤さんの言葉も、『記憶』の地域に対する成果として、また、公共劇場が生み出す価値創造として、重要なポイントであろう。

1

地域の記憶の伝承

『Re: 北九州の記憶』(以下、『記憶』)の原点は、地域の記憶の伝承である。高齢者と若者のそれぞれにとって、地域の記憶を演劇によって伝承することの意義を考察した。

(1) 高齢者にとっての地域の記憶

『記憶』は幸せの舞台、幸せな演劇

取材に協力した高齢者は73名、平均年齢は78.8歳。高齢者へのインタビュー時間は約140時間に及ぶ。そこには一人ひとりの人生がある。取材では高齢者と劇作家との共同作業で言葉が紡がれ、劇作家の手によって新たな物語となり、台本となり、劇場という空間で観客の目前で1つの作品になる。そのことは、取材に協力した高齢者にとってかけがえのない喜びとなっている。取材の際には苦しかったことも嬉々とした様子で喜んで語ってくれる。

「苦労した人は、その苦労話を嬉々として話す。つまりその人は今きっと幸せなのだ。だから、ある意味『記憶』というのは幸せの舞台、幸せな演劇だ。悲劇に終わるところはない。やはり観ていたらみんな幸せに終わってしまう」(取材に協力した小田さん)。

今の世の中を見ていると、当時のことを言いたくなる

現代社会が抱える様々な問題を目の当たりにして、高齢者たちには、過去の記憶や体験を今こそ伝えなければならぬという思いがあるのかもしれない。「今のこの世の中を見ていると、その当時のことを言いたくなるのではないか。そこに芝居を成立させている秘密がある」と言うのは構成・演出の内藤さんだ。

孫のような若者に語りかける高齢者は、自身の思い出を語ると同時に、今の社会が物質的な豊かさを追求するあまりに置き去りにしてきた大事なことを、次の世代に伝えたいという思いもあるのではないだろうか。

過去の記憶の天日干し

取材では、若い劇作家が高齢者に様々な質問を繰り返していき、話し手が語る言葉にただ受動的に耳を傾けるのではなく、戯曲の執筆に正面から向き合う劇作家たちは、高齢者の記憶から新たな物語を立ち上げるために、心の赴くままに、そして食欲に、話を引き出そうと試みる。

父親への取材に立ち会っていた西島さんは、このように振り返った。「父が劇作家の方に思い出を聞いてもらったのは、過去の記憶の引き出しを久しぶりに開けて、天日干しをした感じではないだろうか。初めて会う知らない人に自分の昔話をする人はいないが、劇作家が人の記憶の引き出しを開けるこの企画は、とても素晴らしい」。

(2) 若者にとっての地域の記憶

高齢者の記憶と今が「地続き」に感じる

一方、現代を生きる若者にとって高齢者の記憶を受け止める『記憶』はどのような意義があるだろうか。公演に出演した若い俳優は、お年寄りの昔話の要素もありながら演劇作品としての要素もある。笑える

作品もあれば泣ける作品もある。押し付けがましくなく、楽しんでもらえる確率が高い。それは「人の記憶だから」だと言う。

劇作家の一人の山口さんは、福岡市出身で大学から北九州で暮らしている。戯曲を書くための高齢者への取材では、自分の知らない北九州を知ることができるという。「北九州に住む高齢者の方の記憶と、私たちが生きているこの時代という今が地続きなのだとすることを、インタビューと劇作を挟むことによってすごく感じられた」。

リアルに、生々しく感じる戦争の記憶

『記憶』での多くの戯曲には、第二次世界大戦の戦中や戦後間もない時代の記憶が描かれてきた。そうした困難な時代を生き抜いた高齢者から、若い劇作家たちは直接話を聞いて衝撃を受けることもある。構成・演出の内藤さんは、そこにも大切な意義があると感じている。

戦後75年あまりが経過し、戦争体験世代の、言わば「語り部」となる方々も減少し、社会的にも戦争の記憶が薄れている。その中で、戦争がもたらした困難や傷の深さを今の日本人が思い返すことは、とくに若い世代は大きな意義を感じている。実際に公演に来場した観客の一人は語る。

「戦争について全く知らない、実際に体験していないし、親も体験している世代ではなく、自分が知らないということがすごくもどかしい。自分が知っている方言で、自分が知っている若い俳優が演じている、北九州弁をしゃべる若い男の子が実際にそういう記憶を演じているのを見て、私たちぐらいの年で男の子たちは戦場に行っていたのかと思うと、急にすごくリアルに、生々しく感じるし、知っておかなければいけないと強く思うから、ありがたかった」(観客の溝越さん)。

(3) 演劇を通じた地域の記憶の伝承

演劇によって記憶を保存する実験

『記憶』の関連事業として戯曲講座を開催した八幡図書館の次長を務める富原さんは、母親が若かりし頃、北九州に実在した少女歌劇団の女優だった。その母親が劇作家の取材を受けた経験も踏まえながら、彼女はこう考えている。「本人に聞き取りをしたから、それが全部事実かというとも限らない。劇作家の目が入ることによって、逆にもしかしたら真実に近いものになっているかもしれない。『記憶』にはもちろんフィクションも入ると思うが、残していくべきものだと思う」。

人々の記憶は時間がたてば色褪せていく。その色褪せた記憶を、劇表現として立ち上げていくことで、鮮やかな色を取り戻すことができるのかもしれない。構成・演出の内藤さんは、演劇の特性の1つとして、事実を虚構に落とし込むことで事実とは異なるリアリティーを生み出し、虚構の中でのリアルと、その先にある普遍的なリアリティーを強く感じさせる力があると言う。

「記録は残るが、記憶は残らないと言われる。その記憶をどう保存するかというときに、演劇という手段、戯曲という手段が取れないか。『記憶』は間違いなくその実験だ」(構成・演出の内藤さん)。



過去にも未来にも拡張する時間

実際、北九州市内の図書館に行けば『記憶』の戯曲が書架に置かれており、どの作品でも読むことができる。そして、いつでも、誰でも、その戯曲を上演できる。実際に上演されたことがある。誰かの記憶を戯曲として残し、それを観た人々と共有され、さらにまた別の記憶を呼び起こし、広がりながら残っていく。それは演劇ならではのことであり、他の表現では難しいのではないか。

「普通の戯曲作品は、再演の時に新しい演出や俳優という形で未来に続く。でもこの作品は、高齢者の記憶がベースになっているので、誰かの記憶を呼び起こすことで、過去の方にも作品が進化・成長する。それが、半分はインタビューで半分は劇作という『記憶』の特徴で、作品に含まれる時間が過去にも未来にも拡張することが非常に大きいのではないか」(劇作家の穴迫さん)。

北九州という地域の景色としての歴史

コロナ禍に見舞われた2020年には、『記憶』の過去の作品をオンラインでリーディングするという企画があった。映像を通して改めて『記憶』を眺めることで、劇作家の一人は、アーカイブされている編集された市史や博物館の史料からの知識として歴史を知るのではなく、「景色として」地域の歴史を知ることができたと言う。

「地元の人でも、へえ！何だ、それは？そのようなことがあったのか！というような話を、毎年、取材した劇作家が聞いてくる。驚くような個人史と地域の話が出てくる。その人が死ぬと消えてしまうような記憶も、とても貴重な、北九州という地域の歴史だと思う」(構成・演出の内藤さん)。

能動的な記憶の掘り起こし

大月ヒロ子 (アイデア代表取締役 / おかやま文化芸術アソシエイツプログラムコーディネーター)

昨今、地域の記憶を聞き書きで伝えていこうと、高校生達も巻き込みながら実施する地域が増えている。自分たちが暮らす地域にいる人を訪ねて、お話を聞き、その方が大切にしてきた技術や知恵、これまでの経験などを文字化していく。そこには、ただ一方的に話を聞くだけではないコミュニケーションが生まれている。どのように聞か、何に共感するか、どう受け止めるか、そして、話すことによって生まれる自己肯定感や、地域や歴史の再認識、埋もれていた情報の再発掘など、双方向のコミュニケーションが濃密になればなるほど、そこには貴重で豊かな地域の記憶が堆積していく。

『Re:北九州の記憶』は、聞き手が劇作家なので、文字化の最終形は戯曲となり、やがてそれは舞台上で演じられるお芝居となる。聞き書きをベースにしつつも、編集や創作が入り込むが、その過程を経ることによって、生まれてくるものに一種の普遍性が宿ってくるのがユニークな点だろう。劇作家、語り手、演出家、俳優そして劇場のスタッフ、事業を取り囲む人々の間の絶え間ないコミュニケーションによって、能動的な地域の記憶の掘り起こしが行われ、そこで生まれてきたものが、新たな記憶として地域に残っていくいわば多重螺旋が上昇するような動きのある試みだと言えよう。そしてその螺旋の旋回が、竜巻のように地域の図書館や公民館、学校などを巻き込むパワーを持っていることがさらに面白い。地域の劇場が、そういった動きのコアになりうることを、この10年間の積み上げの中で証明した功績はとてつもなく大きいのではなからうか。

2 人材育成

『記憶』には、地域の記憶の伝承に加えてもう1つ核となる価値がある。それは、人材育成だ。データ分析やインタビュー調査から、劇作家、俳優、スタッフそれぞれの立場から見た成果が浮き彫りになった。

(1) 劇作家

平均年齢31.9歳、11名の劇作家による89本の戯曲

劇作家の育成が『記憶』の大きな柱であることは、事業実績のデータからも明らかである。2012年度から2021年度までの10年間で、『記憶』に関わった劇作家の数は11名、平均年齢は31.9歳。そのうち、2名は初年度からすべての公演で戯曲を創作している。

劇作家各自の戯曲執筆だけでなく、複数の戯曲を1本の舞台作品として成立させるため、構成・演出の内藤さんが繰り返しブラッシュアップを行う戯曲講座も育成の重要なパートを担う。再演作品の新演出のみで上演された2017年度を除く9年間で、戯曲講座は75回(講座の総時間191.5時間)を数える。毎年5名の劇作家が参加したとすると、約1,000人・時間にも及ぶ。成果物としての戯曲集にまとめられた脚本は89本、総ページ数は1,306ページ、総文字数は35万3,308字にも及ぶ。

北九州という地域を拠点に活動する若手の劇作家の人材育成。これらの数字は、その『記憶』の目標に向けて、劇場と参加者が膨大な時間やエネルギーを注ぎ込め、成果を生み出してきたことを物語っている。

『記憶』への参加は修行

インタビュー調査でも、様々な立場から劇作家の育成面での成果を評価する声が聞かれた。2013年に九州戯曲賞にノミネートされ、2017年に九州戯曲賞を受賞した守田さんは「戯曲講座を受けていたタイミングで戯曲賞にノミネートされるようになり、その後に受賞したことを考えると、『記憶』に参加した2年間で修行になったのではないかなと思う」と振り返る。他の劇作家たちも、自身の劇団活動での創作とは違い、劇場からの戯曲の依頼を受けて、「アーティストとして」、「仕事として」創作に取り組むことで、自分自身の成長の手応えを感じているという。

初期の『記憶』の戯曲はインタビューした高齢者のエピソード自体の面白さが前面に出ていたが、最近の戯曲はそれに加えて劇作家の個性がより出てきている、と評価するのはスタッフである。内藤さんのアドバイスも聞きながら、自分がやりたいように書いたという劇作家もいた。10年間積み重ねてきた内藤さんとの関係性の中で、劇作家の育成の深度が深まっていることがうかがえる。

芸術と劇作の良心

「『記憶』は基礎的なところからアウトプットまで人材育成が貫かれている」。こう断言するのは、構成・演出で戯曲講座の指導も行う内藤さんだ。舞台作品としてのクオリティを担保すること、戯曲をどう考えたらいいか、劇作家はどういう生き物かを肝に銘じておくこと。それを忘れると「『ウケれば何でもいい』というような形の作品を書いてしまって、芸術と劇作の良心に反するような作品になってしまう」と、内藤さんは劇作家の本質やあるべき姿、育成の姿勢を語る。

その上で、『記憶』に参加する劇作家は、今まで気付かなかった自身の長所や欠点を他者から指摘さ

れ、他の劇作家や地元の俳優と交流が生まれ、劇作家活動を続ける大きなきっかけになっていると劇作家たちも語る。内藤さんも劇作家活動の継続に『記憶』が果たす役割に触れながら「10年間の作品のアウトプットとしては、やはり成長の手応えは確実にある」と評価している。

若い劇作家の成長を観る楽しみ

地元の若い劇作家が育ち、それぞれの劇団で面白い企画を立ち上げるようになって、以前よりも演劇を観る楽しみが増えたと話してくれたのは、劇作家の取材に協力した高齢者の一人であり、長年、北九州で演劇を見続けてきた小田さんだ。「芝居好きの仲間同士でも『○○さんは、うまくなったね』、『面白い本を書いたね』、『今年のやつはさっぱり意味が分からなかったけれども、あれは何だろうか』という話題になる。そういう楽しさがある」(小田さん)。このように、『記憶』の公演を継続して鑑賞している人々は、地元の若い劇作家の成長ぶりが楽しみになり、劇作家たちもその期待に応えようと奮起する好循環が生まれている。

(2) 俳優やスタッフの育成

人材育成の裾野の広がり

『記憶』の事業は、劇作家の育成を第一の目的に掲げていた。その育成の成果は劇作家のみならず、出演した俳優や、舞台技術や制作・広報などのスタッフにも及んでいる。

事業実績のデータから、10年間の『記憶』の俳優は54名で平均年齢35.5歳、スタッフも54名で平均年齢36.5歳となっている。10年間で稽古の総日数は107日間、総時間数は470.3時間。ただし稽古の日数・時間は公演の形式によって大きく異なっており、台本を手にしたまま上演する「リーディング公演」では5日から7日間の稽古、台本を手離れた本格的な演出による「本公演」では22日から24日間の稽古となっている。

10年間で11名の劇作家が創作した数々の戯曲。その舞台化のために100名を超える俳優・スタッフが、100日間を超える稽古日数をかけて、公演本番に向けた濃密な時間を共有してきた。この創造過程があることで、劇作家だけでなく、俳優やスタッフにも成果が波及し、地域における舞台芸術の人材育成の裾野が広がってきた。

俳優が迷ったときの道しるべ

『記憶』には劇作家として、そして俳優としても関わってきた寺田さんは、「演劇をやりたいと思っている若い世代にとって、私たちの知らないところでこの『記憶』が、みんなの1つの目標地点になっている。『記憶』の成果とは直接的な関係のないところでこの『記憶』の事業が存在し始めている」と語る。内藤さんから、俳優としても演出や指導を受ける経験によって、論理的な戯曲の解釈や、他の俳優やスタッフとの意見を交換することができるようになっている。「俳優が迷ったときの道しるべが頭の中で出せるようになって、俳優としての成長もかなり大きかったと思う」(寺田さん)。

公演アンケートの自由記述からの抜粋

過去の『記憶』公演のアンケートの自由記述から、戯曲や俳優の演技、演出などを高く評価する声を紹介します。

◎人の記憶ってとても素敵だなーと思いました。おじいちゃん、おばあちゃんに昔話をしてもらっている気分でした。人生って素晴らしい！(2014年度)◎舞台を通して、この「記憶」を持つ人が「記憶」を大切に胸にしまっているのだなとキュンとなりました。今回の『Re:北九州の記憶』一番良かったと思います。(2015年度)◎舞台美術がとても凄くて、ああ！そういう仕掛けになっているのか！ってとても驚きました！役者も一人一人のキャラが好きです。(2016年度)◎同じ人が何度も出ているのに全然違う人のように感じて、すごかったです。一人一人の声や演技がすごくてとても見入ってしまいました。皆個性が出て分かりやすく面白くてとてもよかったです。(2017年度)◎さまざまな北九州の記憶を観られて楽しむことができました。新しい記憶を作る。希望のテーマが含まれていて頑張ろうと思えました。(2018年度)◎とてもおもしろかった！今まで3回くらい観たことがあるけど、そのたびに内容が違ってとてもおもしろいです。また来年も実施してください。(2019年度)

見続けているからこそスタッフの成長も見える

舞台、照明、音響のスタッフたちは、プランナーとして『記憶』の作品創造に関わることで、劇場のスタッフワークの成長も感じている。個々のスタッフが自主的にアイデアを出すことを求められ、「まずひとりだけで考えるという経験ができる。考えることを具現化するにはどうしたらいいかということを考える経験ができる。そういう機会がもらえることはすごく大きい」と言うのは音響スタッフの横田さんだ。

観客の一人であり、北九州市内の別の劇場で舞台や劇場の仕事をしている森田さんは、『記憶』のスタートから10年間、欠かさず公演を観続けてきた。「10年と言われて、そんなに続いていたのかと思った。すごく若いころから知っている照明プランナーや音響プランナーがやっているのを見て、こんなにきれいな明かりを出すようになったのか、この音も気持ちいいなとか、見続けているからこそ、スタッフの成長も見える」と、『記憶』がスタッフの育成にも果たしてきた役割を振り返る。

常に作品としてのクオリティーの向上を目指すことで、劇作家、俳優、スタッフの育成に取り組んできた『記憶』。この先も、さらなる高みを目指して地域の演劇人の育成に取り組むことが求められている。

複合的出会いがもたらす成長

渡辺弘 (埼玉県芸術文化振興財団ゼネラルアドバイザー)

北九州という街で暮らしてきた高齢者の方々に、地元の若手劇作家たちがインタビューを行い戯曲化、そして地元の俳優たちが演じるというこの『Re:北九州の記憶』の10年に及ぶ企画は、公共ホールの今や最良のコンテンツといえる。近年は、真似た企画を各地で見られるようになった。なにが良いのか。まず「記録」ではなく「記憶」である。若手劇作家が、それぞれの人々の胸の扉を開けて物語を聞き紡ぐ、その作業で行われる世代間交流が一つの意義。戦争だったり、街の変遷であったり、家族であったりと、同世代との横の交流が主の若手劇作家が、縦に流れる歴史に触れることがまた良い。

次の意義は、若手劇作家たち同士の交流と新たな演出家との出会いだろう。北九州の場合はベテランといえる演出家の内藤裕敬氏が長年この企画を率いてきた。内藤氏が、実践の場で若手を指導し育成するのも良い。まさに劇作家育成事業である。そして俳優の育成も加わる意義。この複合型出会いの事業がよく続いてきたものだ。

私事だが、彩の国さいたま芸術劇場で16年間芸術監督の蜷川幸雄さんが立ち上げた高齢者演劇集団「さいたまゴールド・シアター」と付き合った。蜷川さんは、若手劇作家にこの集団への書下ろしをしてほしいと考えていた。しかし劇団以外のまして高齢者向けに書くことは考えられないと断られ続け、なかなか見つけられずにいた。が、ようやく岩松了さんが引き受けてくれたことで船出ができ、その成果に刺激を受けたケラさん、松井周さんが続いてくれたことで演劇界に新しい風が吹くようになった。風を起こすには、横のものを縦にしてみる柔軟な発想と粘り強い働きかけがいかに必要かと……蜷川さんとは苦労した記憶と新しい出会いの記憶が入り混じるが、このように考える手があったかと少し羨む気持ちを持ちながら以前にこの『Re:北九州の記憶』の舞台を観て思ったことがある。

劇場の企画が様々な人たちを、街の人たちを出会わせ交流させることで育成が始まり成長が起ころ。この記憶の蓄積は地域の大きな財産だ。この蓄積がマグマになり吹き出すように、若手の劇作家や俳優がどんどん出てくることを改めて期待するものである。

3

集合的創造性

人材育成、そして地域の記憶の伝承。その2つが『記憶』の企画の原点だった。10年間継続してきた結果、それとは別に浮かび上がってきた『記憶』ならではの成果が「集合的創造性※」というキーワードである。

(1) 「これは誰の作品なのか」という問い

作品というよりも『北九州の記憶』

『記憶』には一般的な演劇作品とは異なる特徴が数多くある。その1つに「これは誰の作品なのか」という問いに対して明確に答えにくいことだ。間違いなく作品の出発点は、「伝えたい」という強い思いを持って取材に協力した高齢者だ。その話を聞いた若い劇作家たちが面白いと感じ、それを誰かに「伝えたい」という思いが、人に喜んでもらえるような物語を戯曲として編む原動力となる。

完成した戯曲をまとめた戯曲集には、作品の1つひとつに、劇作家と取材に協力した高齢者の氏名が連名で掲載されている。劇作家と高齢者、両者の役割が噛みあってこそ、戯曲として形になると劇作家たちは捉えている。その中で劇作家の一人の寺田さんは、誰の作品かと聞かれて、しばらく考えてからこう語った。「これは作品というよりも、『北九州の記憶』だと思う。私の勝手なイメージだが、作品というドキュメンタリー作品のような感じになりそうだけど、そういうものではない」。

スタッフ全員がクリエイションに関わっている

複数の短編の戯曲を1つの上演作品にまとめ、舞台として立ち上げる役目が構成・演出の内藤さんだ。『記憶』が誰の作品なのかと聞くと、彼はこう断言する。「作り方が普通の演劇とはまったく違う。少なくとも、俺が作りたいものを作ろうとしているわけではない」。

劇場で舞台、照明、音響を担当しているスタッフたちにとって、『記憶』の公演は通常のスタッフ業務と大きく異なる。多くの場合、利用者の安全管理や使用上のサポート、舞台の進行、照明や音響のオペレーションが彼・彼女らの業務の大部分である。そうした平常の仕事とは違い、しっかりと台本を読み込み、登場人物の台詞やト書きから心情や情景を想像し、照明の明るさや色、効果音や背景に流れる音楽、舞台上の大小の道具類などのプランを練る。チームの中で提案し、調整し、設営し、操作する。内藤さんの指示を受けるだけでなく、スタッフ全員でクリエイションに関わっている。技術スタッフにとっても『記憶』は自分たちの作品であり、北九州芸術劇場の事業の柱の“創る”事業、創造事業の現場なのである。

※「集合的創造性」について

京都大学大学院文学研究科教授の松田素二※は、「集合的創造性」を次のように説明している。

他者とつねに接続し、他者と相互に依存しあうなかで構成される個人が発揮する創造性は、一方でその個人のもつかけがえのない能力と技量に規定されながら、他方では個人という存在を超えて社会（共同体）からの働きかけや、個人から社会（共同体）へのアクセスによって（そしてその両方の同時生起によって）生成されている。その意味で、それは集合的な創造性と言えるものである。集合的創造性について重要なのは、その発現する場はつねに創発的（emergent）だということである。集合性の基礎となる社会（共同体）も閉鎖的で固定的なものではなく、開放的で流動的なものだ。

※松田素二（2021）『集合的創造性—コンヴィヴィアルな人間学のために』（世界思想社）

(2) 劇場ビジョンの結実

“創る” “育つ” “観る” の結晶

『記憶』は“創る”創造事業でありながら、先に述べた人材育成の成果からも明らかのように、劇作家、俳優、スタッフを“育てる”事業、学芸事業の側面もある。また、幅広い北九州市民に劇場に対する親近感を感じていただきながら“観る”機会を提供する公演事業としての性格もある。

つまり『記憶』は、北九州芸術劇場の開館当初からの事業方針である“創る” “育つ” “観る” という3つの方針の結晶と言えるだろう。『記憶』のスタートから10年間携わってきた制作スタッフの吉松さんは、このように振り返る。「いろいろな人に助けられながら、いろいろな人を巻き込みながらやれるという点で、それまでにやってきた劇場の事業とはまた少し違う形を生んだのではないか」。

10年間継続できた共同作業は奇跡的

演劇に限らず、様々な文化芸術において創造性が語られる際に、多くの場合、特定の才能のある人間が生み出していると考えられることが多いが、近年、多様な人間が集合する、その集合性や集合的な営みが創造の源泉となる、「集合的創造性」という考え方が注目されている。

演劇表現も集団作業には違いないが、内藤さんは、集合的創造性という考えの下での演劇の共同作業は、うまくいく場合と失敗する場合と極端に分かれると言う。「意見が衝突してうまくいかず、分裂するのが普通。突出したり、いびつになったりすると、誰かが『それは駄目だ』と言わなければいけない。それでも『記憶』が10年間でできているのは、奇跡的なことかもしれない」。

劇場が生み出す「集合的創造性」

技術スタッフにとっても、1回で終わらず10年間も続く企画に関わることは、なかなかできない貴重な経験だ。高齢者や劇作家、演出家や俳優、スタッフなど、一緒に作品を良くしようとしている。「そういう人たちの中の一人になるという経験ができるのは、劇場という場所で『記憶』を作っているからだと思う」（音響スタッフの横田さん）。

事業の企画制作、広報、舞台技術といったスタッフ各自の専門領域があるために、気がつく仕事で縦割りになり、自分のセクションの中で完結してしまうこともある。だからこそ『記憶』のように「他のセクションともっと一緒にやっていけるようなものを劇場としてもこれからは作らないといけない」（制作スタッフの吉松さん）。

(3) 変化を受け入れながら受け継ぐ創造性

『記憶』の色や重みを壊さないように

「劇作家にとっては、他人の話を聞いて、そこから戯曲を書き上げていくことは、自分自身の着想から書くよりもハードルが高い」と内藤さんは語る。戯曲を書く前から他者との関係が始まっており、そこから社会的な視点が戯曲の中に含まれることになる。いかにして個人の問題から社会の問題に接続させるのが、劇作家には要求される。

技術スタッフも、『記憶』の企画には特別な思いを持って挑んでいるようだ。10年間続けてきた結果、照明や音響のプランナーの役割を先輩から後輩へと受け継ぐことで「『記憶』の色というか、重みというか、そういうものを壊さないように守りながらも、人が代わることで少しずつ変化しながら、受け継いでいるものがある」（音響スタッフの横田さん）。

膨大な人たちが舞台に乗っている

『記憶』作品に関わっている、乗っている人の数が全然違う。企画する人がいて、取材に協力してくれるお年寄りの方々がいて、その記憶の中に出てくる別の人々がいて、それを聞いた劇作家が戯曲にして、

劇作家を通じた地域の演劇の活性化

北九州芸術劇場は、開館以来、様々な形で地域の演劇人の育成に力を注いできたが、『記憶』の開始以前は、俳優の育成に重点が置かれていた。「劇作家や演出家が増えないと、地域の演劇の活性化にはつながらないと感じていた」と、企画のオファーを受けた当時を構成・演出の内藤さんは振り返る。

観客として来場した一人で、下関で演劇活動に携わってきた為貞さんは、演劇を通じた地域おこし、過疎地の活性化に関心を寄せてきた。2021年に『記憶』の舞台公演を初めて観た彼は、「高齢者に取材した話が、こういう舞台になるのかと思った。1つひとつのエピソードは、突き詰めれば何ということはない話だが、それを1つひとつのドラマに仕上げていくのがすばらしい。こういう視点は大事だと思った」と、可能性を感じている。

また為貞さんは、地域文化をさらに豊かにするためには、若い劇作家の方が、自己実現や自己満足のために芝居を書くのではなく、何かを地域に還元していく意識を心の片隅に持っていることが大事だと、『記憶』を通じて気づいたようだ。

(2) 劇場から外に出た戯曲の活用

戯曲集は立派な郷土資料

『記憶』の関連事業の1つ、八幡図書館での戯曲講座(「戯曲を読む、記憶を読む」)に参加する高齢者たちは、受講生仲間と戯曲の台詞の読み合わせや、『記憶』の公演の俳優による簡単な演技指導を心から楽しんでいる。「何人かで1つの戯曲を読むので、みんな仲良くなる」、「自分が登場人物になったらどうするか、いろいろ考えて読むようになったのがすごく楽しい」、「私たちがその場で経験させてもらっただけでもったいない」と口々に語る。

戯曲講座の企画は、八幡図書館の次長を務める富原さんによるものだ。以前から小説などの朗読講座を開催してきたが、自分を表現する楽しみを味わっていただこうと、講座の内容を戯曲の読み合わせをメインとした講座にした。「戯曲集は立派な郷土資料だと思う。その存在を知っていただきたいという思いがあって、うちで講座をしていただけないかとお願いしたのが、図書館で戯曲講座をするようになった始まりだ」と富原さんは振り返る。

共有財産としての戯曲

実は、『記憶』の戯曲作品はすでに共有の知的財産として活用されている。北九州市内の図書館には、事業を始めた2012年以降の『Re:北九州の記憶』戯曲集のすべてが書架に並べられ、誰もが自由に借りて、読むことも使うこともできる。

「ある集まりで『記憶』の戯曲が実際に上演されたこともある。『記憶』は北九州の人たちにとって共有財産になっているのかもしれない」と言うのは劇作家の一人の守田さんだ。劇場の『シアターラボ』という別の企画から派生した演劇人の集まりで、会場は高齢者施設だった。地元の俳優とお年寄りたちとで新しい演出で戯曲を演じ、観客として観た守田さんも「すごく面白かった」という。

八幡図書館の富原さんは、今後の企画の展開として「子どもにも読んでほしいし、異世代の市民同士でも読んでほしい」と希望を語る。戯曲としては小学校の高学年や中学生なら理解できる内容のものもあるので、例えば、夏休みに子どもたちで演じたり、戯曲の登場人物と同じ年代の役で高齢者と若者が一緒に演じたりと、イメージが膨らむ。

(3) 文化的な共有地(コモンズ)の形成

芸術的民度の底上げ、その先に見えるもの

長年、北九州芸術劇場に関わり続けてきた構成・演出の内藤さんは、地元を拠点にした劇作家が増え、作品を書く頻度が増えたことで、北九州市内で芝居が上演される数が増えたと同時に、演劇を志す若者

も増え、若くて粗削りだが面白い俳優が毎年出てきていると話す。さらに『記憶』のような活動は、「芸術的民度の底上げにつながると思う。劇作家や俳優を育成するわけだし、今まで劇場に足を運んでいなかった高齢者が、たくさん来るわけだから。劇場に来る世代の幅が広がり、認知されて、その必要性を実感してもらえる」と確信する。

「文化的コモンズの形成に向けて」という副題の一般財団法人地域創造の調査研究(2014)では、地域の共同体の誰もが自由に文化的な営みに参加できる共有地を「文化的コモンズ」と表している。また、文化的コモンズを形成するのは公立文化施設だけではなく、文化に関わるあらゆる施設や場所、団体や組織、それらの活動が挙げられる。「こうした多様な主体が相互に関わりあうことで、地域固有の文化的コモンズが形成されていく」としている。

共有財産としての『記憶』の戯曲が、劇場での上演だけではなく、市民センターでのリーディング上演、図書館での戯曲講座と広がる。さらには図書館の書架に並ぶ戯曲集を手にした誰かが、誰かと一緒に戯曲を読み、新しい演出で、誰かの目に触れる。その先に広がっているのが、おそらく北九州市ならではの文化的コモンズなのではないか。

舞台作品の奥に広がる文化的コモンズ

吉本光宏 (ニッセイ基礎研究所研究理事)

『Re:北九州の記憶』の最終的なアウトプットは劇場で行われる公演だ。しかし、その背後には舞台づくりに関わった人たちの思いが幾重にも積み重なっている。その人たちが、劇作家や演出家、俳優、舞台スタッフだけではない、というのがこの事業の最大の特徴だろう。

何よりも北九州の記憶を語るお年寄りの存在がある。この10年間で話を伺ったお年寄りの数は73名、インタビューは140時間に及ぶ。聞き役は北九州を拠点に活動する若手劇作家だ。彼らには「戯曲を作る」というミッションが与えられているから、聞く力が問われる真剣勝負だろう。その姿勢に誘われて、お年寄りも今まで誰にも話さなかったことを、見ず知らずの若者に打ち明ける。

そのとおき素材を戯曲化することで、お年寄りの思いに若手劇作家の思いが重なっていく。戯曲講座では内藤さんの劇作家としての知恵や経験、若手育成にかける思いが込められていく。そして1本の上演台本がまとめられ、仕事をしながらでも北九州で俳優を続けたいという思いを抱いた若手俳優たちが短期集中の稽古を重ねて本番を迎える。

本番の舞台では北九州の歴史や場所が登場する。市史に掲載された史実とは違っても、それは確かに市民の記憶上の史実に基づいた舞台作品だ。だがそれは『Re:北九州の記憶』から生まれた物語のごく一部に過ぎない。これまでに89本、1300ページ、35万字に及ぶ戯曲が誕生しているからである。お年寄りのかけがえのない記憶が若手劇作家の思いを込めた戯曲に変換され、この先も北九州という街の財産として受け継がれていく。

『Re:北九州の記憶』。それは公共劇場を拠点に北九州の共有財産としての文化的コモンズを生成していく事業にほかならない。

5

公共劇場の価値創造

これまで見てきた4つの成果を踏まえながら、改めて、公共劇場の価値とは何か、『記憶』を通じて捉え直し、10年間での成長を踏まえた『記憶』の次のステップを考える。

作品というよりも『北九州の記憶』

「公共劇場の仕事として、これほどの確な企画はない」。2012年に『記憶』が事業としてスタートする際に、劇場から構成・演出の依頼を受けた内藤さんはそう思った。長年、公共の劇場やホールで、自身が主宰する劇団の公演だけでなく、ワークショップや講座などの教育普及や人材育成など、多種多様な演劇事業に携わってきた内藤さんだが、「若者が楽しめる企画、高齢者が楽しめる企画のようなことはあるが、地域のお年寄りや若者が交流しながら作品を作る自主事業は、あまり聞いたことがなかった」。

劇場でお客様の荷物を預かるクロークやパンフレット配布などのボランティアの経験を経て、劇作家として『記憶』に参加するようになった坂井さんは、劇場が地域の人に向けて『記憶』を作り続けてきたこと自体から公的機関としての使命感が伝わってくるという。

「地域や市民と共にあることが、この劇場の背骨になっている。東京からの著名な劇団や有名人が出演する公演も大事だとは思いますが、もっと地域の人たちと何かできることはないか。地域に演劇や文化を浸透させる仕組みをつくっていく取り組みを、もっと戦略的にやってもいいのでは」と、坂井さんは劇場に期待を寄せる。

北九州で演劇をしながら生活をする

『記憶』に出演した地元の劇団の俳優たちは、口々にこの事業がいかに北九州の演劇人にとって貴重な活動であるかを語ってくれた。特に、演劇と仕事や生活との経済的・時間的なバランスの中で演劇をいかに続けられるかという切実な問題に直面する若い俳優たちにとっては、『記憶』が支えになっている。

北九州芸術劇場という場所、『記憶』という企画のおかげで「演劇活動を完全にやめなくていいというのは、救いだし、ありがたい」、「契約社員で働いていた某デパートで“副店長になれ”と言われて、“僕、演劇をやりたいんです”と言って辞めた」、「正社員じゃなくて週3日でもいいという会社など、演劇ができることを第一条件に仕事を選んでいる」、「北九州であれば演劇をしながら生活できる」というのが彼らの思いだ。

「『記憶』は俳優や演劇を辞めなくてもいいと思える要因の1つに絶対になっていると思う。“私はもう辞めた”とならないのは、希望だと思う」(出演者の平嶋さん)。「演劇を志して東京に行く人が多いけど、僕は、

就職して仕事をしながらでも演劇が続けられたらいいと思う。北九州で演劇をやりながら生活できるのがベスト」(出演者の森川さん)。

若い演劇人や地元の劇団を応援する市民の存在

劇作家の取材に協力した高齢者の一人、坂根さんは「今、若い人たちがこうして芝居をして、私もいろいろな若い人と付き合ってきて、自由に自分の表現をやってくれている。それを見て、若い人たちが生き生きとやっていることが、この頃、分かり始めた。若い人が一生懸命頑張ってくれて、華やかに生きてほしい」と、熱いエールを送る。

八幡図書館の戯曲講座に参加した吉田さんは、以前は地元で劇団があることをまったく知らなかったが、講座がきっかけで地元の劇団を応援したいという気持ちが生まれた。講座の講師をしてくれた俳優たちの劇団の公演があるときは、「日ごろ教えてくださっている先生が、どんな演技をするのか興味がある」と、北九州芸術劇場やそれ以外の劇場にも見に行くようになった。

公共劇場として、演劇人としての作品に対する責任

大学を卒業するかしないかの年齢で、北九州芸術劇場という公共劇場から「劇作家としての仕事」を依頼されたことは、非常に貴重な機会だったと話す劇作家の穴迫さん。「『記憶』で感じる作品に対する責任を果たすという感覚は劇団公演では持てない。それが劇場の評価にもなると思うと、作品を作ることにする責任は大きい」。

観客として公演を観た為貞さんは、「高齢者の記憶から劇作家が取材して、その中から取捨選択して、1つの舞台作品に仕上げていくというところに、劇作家というか劇場全体が責任を持っている感じがした」と言う。

公共劇場として、劇作家としての作品に対する「責任」が感じられるからこそ、そこに関わった市民は、地元の演劇人の活動に共感し、その演劇人としての生き方を応援したくなるのだろう。

成長したらさらにハードな取り組みを

「スタッフ側の目線として、作品が最初より作りやすいというか、表現されるものがどんどん分かりやすく、作ることが明確になって、いろいろなことを表現しやすくなってきている。劇作家に関しても、役者に関しても、スタッフに関しても、きちんと表現ができたというか。そのような気がする」(舞台監督の谷川さん)。出演者も、いかに高いクオリティーを保ってお客様に観ていただけるか、演劇としての質的な成果をすく意識するようになった。構成・演出の内藤さんは「この10年で成長はしているが、成長したらたまた劇作家というのは、またもう少しハードな取り組みもしていかなければならない」と次のステップを期待する。

北九州発の『記憶』モデルと劇作家たちの今後の活躍

近年、高齢者の地域とのつながりをサポートすることで、社会的孤立の回避や認知症などの疾患の予防といった、福祉や医療面での効果を期待する、いわゆる「社会的処方」という考え方が、公共劇場に期

劇場、音楽堂等の活性化に関する法律が規定する「劇場、音楽堂等の役割」

『記憶』の事業がスタートした2012年は、国が「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」を公布、施行した年でもある。この法律の前文には、次のような記述がある。

劇場、音楽堂等は、文化芸術を継承し、創造し、及び発信する場であり、人々が集い、人々に感動と希望をもたらし、人々の創造性を育み、人々が共に生きる絆(きずな)を形成するための地域の文化拠点である。また、劇場、音楽堂等は、個人の年齢若しくは性別又は個人を取り巻く社会的状況等にかかわらず、全ての国民が、潤いと誇りを感じることでできる心豊かな生活を実現するための場として機能しなくてはな

らない。その意味で、劇場、音楽堂等は、常に活力ある社会を構築するための大きな役割を担っている。さらに現代社会においては、劇場、音楽堂等は、人々の共感と参加を得ることにより「新しい広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能も期待されている。また、劇場、音楽堂等は、国際化が進む中では、国際文化交流の円滑化を図り、国際社会の発展に寄与する「世界への窓」にもなることが望まれる。

このように、劇場、音楽堂等は、国民の生活においていわば公共財ともいえるべき存在である。これに加え、劇場、音楽堂等で創られ、伝えられてきた実演芸術は、無形の文化遺産でもあり、これを守り、育てていくとともに、このような実演芸術を創り続けていくことは、今を生きる世代の責務とも言える。

待される役割のひとつとして関心を集めている。

見方によっては、この『記憶』における高齢者との様々な関わり方を、文化芸術による社会的処方と捉えて福祉や医療面の効果と捉えることができるかもしれない。しかし、10年間この企画に伴走してきた内藤さんは、「福祉をやっているわけではない」と何度も繰り返す。「単純におじいちゃん、おばあちゃんは年が離れているだけで、ただものづくりをするために間違いなく必要なパートナーになっているというだけの話」。その姿勢こそ、公共劇場として、あるいは演劇人として必要な「責任」なのかもしれない。

国内のいくつかの公共劇場では、市民参加型や地域密着型の演劇事業として『記憶』をモデルにした取り組みが見られる。『記憶』は、北九州の様々な場所で、様々な主体と連携しながら、市民との関係を生み出してきた。これをモデルとした事業が各地の公共劇場に広がるとともに、北九州の若い劇作家が、全国各地で活躍するようになる日が来ることを期待したい。

劇場は人と街の物語を創り繋げる装置

津村卓（地域創造プロデューサー）

「人間は、なぜ物語を必要とするのか？ 私たちは日々受け入れられない現実を、自分の心の形に合うように転換している。誰もが作り出し、必要としている物語を、言葉で表現していくことの喜びを伝える」小川洋子(2007)『物語の役割』(ちくまプリマー新書)

人はそれぞれ自分自身の物語を持ち、その生き方を構築している。その物語を書き換えれば、これまでと違った人生を生きていくことになる。同じように街にも物語が必要である。ただ人との違いは、その地域特有の歴史や、積み上げられてきた人の営み、そして継承されてきた文化としての物語の上に、新たな物語を更新していかなければならない。出会いには、偶然の出会いと共感の出会いがある。市民に対し多様な出会いを演出することで、学びとともに新たな物語が創造されていく。そこに生まれる文化的な営みこそが、人々の幸せを生むと共に地域の継続を果たす役割があり、劇場はその人と街の物語を創り繋げて行く装置であり拠点でなければならない。

最後に、そろそろ単なる評価と管理することが主ではなく、地域全ての人と街に向き合い、提案していく仕組みを創ることこそ公共ホール・劇場としての価値を発揮できるのではないだろうか。





『Re:北九州の記憶』

公演の記録

北九州芸術劇場小劇場

日程 平成25年3月2日(土)・3日(日) 14:00

会場 北九州芸術劇場 小劇場

構成・演出 内藤裕敬(南河内万歳一座)

作 内藤裕敬(南河内万歳一座)、穴迫信一(劇団ブルーエゴナク)、鶴飼秋子(さかな公団)、塩津順子(のこされ劇場≒)、藤本瑞樹(劇団二番目の庭)、脇内圭介(飛ぶ劇場)

出演 穴迫信一、板山幸枝、鶴飼秋子、内山ナオミ(飛ぶ劇場)、大庭卓朗、岡田重輝、加賀田浩二、塩津順子、恒成功、恒成アヤコ、泊篤志、守田慎之介(演劇関係いすと校舎)、脇内圭介

インタビュー協力者 板山幸枝さん、岩崎和雄さん、大庭卓朗さん、大庭文子さん、岡田重輝さん、柴田秀夫さん・和喜さんご夫妻、田中一昌さん、恒成功さん、能美利次さん、藤江龍夫さん、福田茂子さん、矢永敬之介さん

北九州芸術劇場小劇場

日程 平成25年12月21日(土)・22日(日)・23日(月祝) 14:00

会場 北九州芸術劇場 小劇場

構成・演出 内藤裕敬(南河内万歳一座)

作 穴迫信一(ブルーエゴナク)、鶴飼秋子(さかな公団)、塩津順子(のこされ劇場≒)、寺田剛史(block)、藤本瑞樹(二番目の庭)

出演 穴迫信一、阿比留丈智(飛ぶ劇場)、鶴飼秋子、内山ナオミ(飛ぶ劇場)、小田晏雄、加賀田浩二、高野由紀子(演劇関係いすと校舎)、寺田剛史(飛ぶ劇場)、橋本隆佑(超人気族)、松尾樹明、宮村耳々、門司智美、リン(超人気族)、藤田辰也(南河内万歳一座)

インタビュー協力者 有馬多賀子さん、石川博司さん、内山昌子さん、岡山リエさん、小川巖さん、小田晏雄さん、神谷義幸さん、田中靖朗さん、古川峯子さん、松尾樹明さん

北九州芸術劇場小劇場

日程 平成27年2月28日(土)・3月1日(日) 14:00

会場 北九州芸術劇場 小劇場

構成・演出 内藤裕敬(南河内万歳一座)

作 穴迫信一(ブルーエゴナク)、鶴飼秋子(さかな公団)、塩津順子(のこされ劇場≒)、寺田剛史(block)、藤本瑞樹(二番目の庭)、守田慎之介(演劇関係いすと校舎)、脇内圭介(飛ぶ劇場)

出演 穴迫信一、内山ナオミ(飛ぶ劇場)、河口玲子(劇団C4)、高野由紀子(演劇関係いすと校舎)、寺田剛史(飛ぶ劇場)、野口和夫(演劇作業室紅生姜)、前元優子(劇団C4)、宮村耳々、守田慎之介、門司智美、リン(超人気族)、脇内圭介

インタビュー協力者 審亮一さん、荒木龍秀さん、池田輝康さん、今村淳子さん、江藤綾子さん、大島葉子さん、下川朝子さん、田中貞子さん、西島武さん、吉富治郎さん、吉本照さん

北九州芸術劇場小劇場

北九州芸術劇場小劇場
</

『Re:北九州の記憶』

戯曲一覧

※各年度のQRコードから戯曲をご覧ください。

※平成29年度は再演作品での上演

※戯曲の使用や事業内容などについては、北九州芸術劇場までお問合せください。

平成24年度

- 「ある出会い ～戸畑 鞘ヶ谷グラウンドにて～」
- 「小倉の話」
- 「彼らは防空壕で」
- 「穏やかな追憶」
- 「八幡へ帰る」
- 「父と歩く」
- 「大小の果て」
- 「もやもや橋」
- 「門司にて」



平成25年度

- 「カクテルの色 ～小倉 スタンドバーにて～」
- 「林帆の海～洞海湾にて～」
- 「門司港、夕方に歌」
- 「初めてパーティ券(1500円、今でいう5000円前後)を買わされた日の話。」
- 「昭和12年7月31日」
- 「雨と小文字焼き」
- 「潮風と芝居」
- 「お花が好きな女の子」
- 「カンパン」
- 「自宅船」



平成26年度

- 「バイオリン弾き ～戸畑 夜宮青少年センターにて～」
- 「待つ女 ～小倉 ある駅で～」
- 「ダム/はじまり」
- 「続・小倉の話」
- 「家族」
- 「最後の結婚式」
- 「左官屋さんの恋」
- 「スーツの人」
- 「製鐵のタオル」
- 「うたいましよう」
- 「不思議なことでもあるのかい？」
- 「ヨシモト流」
- 「冷めたライスカレー」
- 「隠し砦の三女子高生」
- 「ながめる」
- 「まちなかのカフェにて」



平成27年度

- 「鳩と世界と日本と八幡と～国立霞ヶ丘競技場にて～」
- 「保塚さんと夕方の小倉」
- 「かぞく」
- 「ユキエとミドリ」
- 「コーラの噂」
- 「天井」
- 「踏切のそばの小屋」
- 「あがる」
- 「籠の中の男たち」



平成28年度

- 「別れの前日」
- 「こんにやく芋のはなし」
- 「いただきます」
- 「カブちゃん」
- 「洗濯川」
- 「それもきっと本当」
- 「第3の男」
- 「門司のヤンキー、喫茶店に行く」



平成30年度

- 「ザイツミキ・ビデオ伝説」
- 「春夢」
- 「少女歌劇団の話」
- 「妊婦とバスの話」
- 「来たれ！」
- 「リンタクの恋」
- 「おつかれさん」
- 「シリ会いたい」
- 「演劇研究会城野寮」
- 「無法者とピアニスト」



令和元年度

- 「忘却に向けて」
- 「帰り道の妄想」
- 「路地裏の懺悔」
- 「私たちは、穴に落ちた」
- 「よくお似合いですね」
- 「セムフのはなし」
- 「嘘つきが私の始まり」
- 「それでも私は許さない」
- 「はなみのはなし」
- 「松の皮を削る話」
- 「退職の日」
- 「サウナと熟れた恋人たち」



令和2年度

- 「臍の日」
- 「Q5氏の会議」
- 「めしあがれ」
- 「自転車泥棒」
- 「憧憬」
- 「選ってきた極道」



令和3年度

- 「居なくなった55人へ」
- 「辿り着いた旅館」
- 「女たち、横丁で」
- 「ウサギのつくりかた」
- 「白い壁の思い出」
- 「ただそれだけの事」
- 「そこには何もなく」
- 「夕闇まぎれて」
- 「猫のいる生活」



アドバイザー会議の委員紹介、 開催概要

『Re:北九州の記憶』と創造・学芸事業調査研究について

北九州芸術劇場では2003年の開館から、劇場の運営や事業の成果や問題点、課題を把握し、その改善につなげるため、事業評価調査を毎年実施してきました。2021-22年度はその調査に加え、10年間実施してきた事業『Re:北九州の記憶』が生み出した成果を把握、検証するため「創造・学芸事業調査研究」を実施しました。

調査研究の実施に際しては、公共劇場の運営等に関する専門家からなるアドバイザー会議を設置し、調査の内容や分析、報告書のとりまとめについて意見や助言をいただきました。

アドバイザー会議のメンバーと開催実績

大月 ヒロ子	有限会社アイデア代表取締役／おかもま文化芸術アソシエイツプログラムコーディネーター
日下 菜穂子	同志社女子大学現代社会学部教授
津村 卓	一般財団法人地域創造プロデューサー
吉本 光宏	株式会社ニッセイ基礎研究所研究理事
渡辺 弘	公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団ゼネラルアドバイザー

- 第1回 2021年6月25日 | 調査研究の目的、調査方法
- 第2回 2022年3月6日 | 調査結果中間報告、今後の調査方法等
- 第3回 2022年9月5日 | インタビュー調査から見えてきた成果・効果、アンケート調査結果
- 第4回 2023年2月26日 | 報告書の構成案

創造・学芸事業調査研究の内容

- インタビュー調査(対象:インタビューに協力いただいた高齢者とその家族4名、構成・演出1名、劇作家4名、出演者4名、スタッフ5名、関連企画担当・参加者5名、公演来場者4名)
- 『Re:北九州の記憶』来場者へのアンケート調査(2012年度実施分からの再集計を含む)

エピローグ

“記録”は図書館や資料館で保存する事が出来るけれど、“記憶”を保存するのは劇場の仕事ではないか? 「Re:北九州の記憶」は、そのような問いかけからスタートしました。

11年間で延べ73名の高齢者の方々へインタビューをさせていただき、その記憶をモチーフに、89の物語を創作。劇作家たちがいつも捉えようとしたのは、ある一点にのみ存在する具象や出来事ではなく、その奥に見え隠れする、人々の普遍的な願いや思いです。舞台を通して、観客たちもまたその願いや思いに共感し、時代と世代とを超えて人々の「記憶」と「思い」が交錯し合い、『Re:北九州の記憶』は、私たちが思い描いていた以上の大きな螺旋を描きながら、その輪郭を広げていきました。

ここに描かれてきたのは、大河ドラマのような歴史の大通りでもなく、時代を動かした一人の英雄の物語でもなく、北九州という街に暮らし、この街を愛し支えて来た市井の人々の、日々の営みの物語です。激動の時代を生きていくための苦勞、戦争のない平和な時代を継続させるための汗と我慢と頑張り、そんな日々の中に輝くさやかな楽しみや淡い恋物語。そのひとつひとつが、私たちが今生きるこの街へと繋がっています。

幾度となくやって来る天災やパンデミック、そして戦争や紛争。世界が一瞬にしてその姿を変え、人や社会が分断されてしまうことを、私たちは実感を持って体験して来ました。けれど、かけがえのないこの街の財産である「記憶」によって、私たちが再び繋がり合うことが出来れば、いつでも未来への一歩を進めることが出来る。そして同時に、演劇には、演劇という共同作業でしか成し得ない、人と人とを、温かな体温を持って繋いでいく力があるのだと、確信しています。

先人たちが歩み続けて来たこの道の向こうに、私たちはこれから何を想像し、何を作り出し、何を残していくのか。終わらない物語の続きを、この街の皆さまと共に、描いていけたら幸いです。

2023年3月
北九州芸術劇場

高齢者の記憶から生まれた物語を舞台にしたら北九州の記憶になったおはなし

〔発行日〕

2023年3月31日

〔調査・編集〕

株式会社ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室

〔デザイン〕

尾中俊介 (Calamari Inc.)

〔イラスト〕

山川順子

〔舞台写真撮影〕

木寺一路 (p.25 「もやもや橋」)
藤本彦

〔発行〕

公益財団法人 北九州市芸術文化振興財団
北九州芸術劇場
〒803-0812 福岡県北九州市小倉北区室町1-1-11
TEL 093-562-2620

〔助成〕

文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会



©北九州芸術劇場

本報告書の無断転載、コピーはご遠慮いただきますようお願いいたします。